

連載 それぞれのアスベスト禍 その74

中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会 古川和子

余命宣告から数年

本多公二さんが中皮腫を発症したのは2007年だ。

大阪市内に住んでいる本多さんはその当時、介護タクシーの乗務員として働いていた。息切れを感じて診療機関を受診すると「肺気腫」といわれた。タバコが原因だと思った。しかしその後、胸水貯留などの症状があることからいろんな検査をした。

左胸膜中皮腫だと確定診断がくだったのはかなり時間がたってからだった。

本多さんから関西労働者安全センターの事務所に電話がかかってきたのは2010年頃だったと思う。本多さんの話を聞いた私は「すぐに会いましょう」といって、事務所に来てもらった。持参した資料を見ているうちに「大変だ、早く休業補償請求をださなければ」となり、大阪中央労働基準監督署に電話して業務終了時間を確認し「いまから行きます」と伝えて本多さんと同行していた友人の車で向かった。夕方5時過ぎだった。

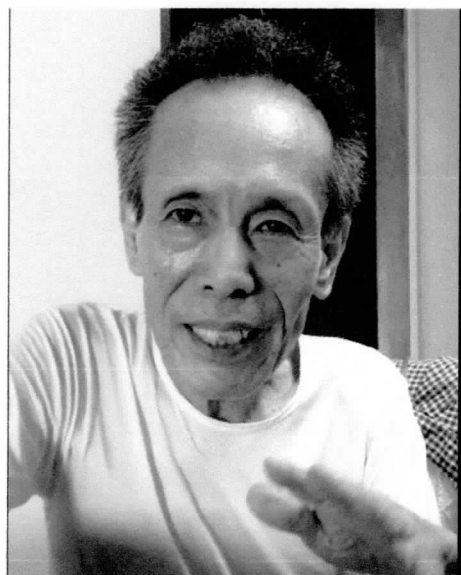
本多さんは20代の頃数年間、電気工事の仕事をし、その後はアスベストとは無関係の職種だった。この電気工事会社の社長は既に亡くなっていた。「会社が無いので

労災申請は出来ないと思っていた」という本多さんが事務所に電話を架けてきたのは、大阪国立医療センターの関係者に「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」の存在を教えてもらったからだ。

本多さんの元勤務先の社長は故人となっていたが、社長の妻がまだ存命していた。当時、事務を担当していた妻は本多さんのことを覚えていたので証明を書いてくれた。

しばらくして本多さんは労災認定となった。

以後本多さんからは、労災不支給決定処分を受けたが審査請求期限が過ぎてしまっ



本多広二さん

ている相談者や就労証明困難な相談者、などなど数人の中皮腫患者、家族を紹介してもらっていた。自分の経験から「家族の会に相談すれば力になってくれる」と言っているようだ。本多さんはかなり前から自身のブログを運営している「余命宣告されたアスベスト患者の嘆き」というタイトルで、結構多くの人が閲覧している。前述した中にはこのブログ書き込みによって紹介してもらった方もいる。

先日、久しぶりに本多さんから電話を貰ってご自宅を訪問した。大阪市住之江区の大きな住宅団地で、敷地内に入るには厳しいチェックがあり一苦労した。私の日常から比べると異空間のような樹木が並び、高層住宅団地の一角にある本多さん宅はお盆明けの暑い最中でもエアコンは不要だった。

会ってから長い時間が経過しているが、二人でゆっくりと語り合うのは初めてだった。すぐに失礼を…といいながらも2時間近く居座ってしまった。

中皮腫発症10年のキャリアはさすがに重かった。発病した当時、お迎え合いと最愛の娘さんとの別れを経験して、「うつ」となった中皮腫患者の経験談は尽きることが無かった。多様な話の中で、今回集中的に聞いたのは「介護」のことだった。ひとりになってしまった本多さん自身が直面してきた問題だ。

本多さんは国立大阪医療センターを主として治療を行い、緩和ケアについても数か所の病院を見学している。多根総合病院もそのひとつであり、私も本多さんの紹介で

緩和ケア病棟の見学をすることが出来た。

本多さんの場合は、診察も含めて週5回ほど訪問してもらっている。だから日常生活では不自由することはないという。しかし、酸素を抱えての外出は思うようにいかない。

また最近、自宅で動くことも息苦しくなっている。そのような本多さんなので、周辺のテーブル上には、ノートパソコンと大量の薬袋、携帯電話、メモ帳が置いてあるのが目に留まった。そして愛飲しているコーヒーが手軽に沸かせるように、すぐ近くにコーヒーメーカーを置いてあった。

あっという間に過ぎたほど楽しい時間だったが、本多さんの疲労もめだちはじめたのでまたの来訪を約束して帰路に就いた。

この日、本多さんから学んだことは「中皮腫になったらすぐに介護申請をする」ということだ。確定診断がついたころは症状が軽いので「まだいらない」と思うだろうが、手続きには時間がかかるし、症状が急速に進んでしまっただけで慌てて申請しても間に合わない場合があるという。ためらわないで手続きをするように、と繰り返し語っていた。

久しぶりに会った本多さんは、「爽やかな70歳」になっていた。苦しい毎日のはずなのに、顔に刻んだしわと笑顔が彼の豊かな人生を物語っていた。

余命宣告されたのは数年前のこと。

いつまでも頑張っていて欲しい、と心より願っている。